ゲストハウスカ　第7回　前田有佳利（ゲストハウスを旅する編集者）

コンセプトは〝高知大使館〟!? タウン誌の元副編集長が営む宿

高知市に、高知県全域を知り尽くした旅の達人が運営するゲストハウスがある。そこには、高知の魅力を凝縮することで「通過」を「滞在」に変える秘訣が隠されていた。

1「かつおゲストハウス」の外観。2階には手作りのテラスやウッドデッキも。2 宿泊部屋「かつおルーム」は、かつおの群れが海の中を泳ぐイメージでデザイン。3 オーナーの前田真希さん。子育て中のママでもある。

DATA

かつおゲストハウス

住所●高知県高知市比島町4-7-28
電話●070-5352-1167
料金●相部屋2,800円～、個室3,800円～（1泊素泊まり）

坂本龍馬が日本史の教科書から消えるかもしれない。そのニュースを聞いて唖然とした。NHKの大河ドラマ『龍馬伝』や三谷幸喜脚本の『竜馬におまかせ!』を観て育った世代としては、主役降板の通知に匹敵する衝撃だった。今回は、そんな龍馬の生誕の地・高知県高知市にあり、高知を代表する新たな存在となりえる宿「かつおゲストハウス」を紹介したい。

JR高知駅から徒歩約10分。穏やかな街並みに、ひっそりとしながらも異彩を放つ不思議な建物が見つかる。民家のような造りだが、白色の外壁には複数の青いライン。看板に記された屋号を認識するのと同時に、建物全体が高知名物・かつおを模したデザインであることに気付く。ここが「かつおゲストハウス」である。

〝高知大使館〟というコンセプトのもと、地元アーティストと共にセルフリノベーションを行い、民家を高知色満載のゲストハウスへと見事に変身させている。土佐和紙の襖や障子に描かれるのは泳ぐかつおの群れ、高知特有の宴会文化「おきゃく」を襖2枚分のイラストで表した部屋には手作りの掘りごたつや大漁旗、四万十川と沈下橋をかたどった扉の先にあるトイレには四万十町の地域情報を知ることができるパンフレットや書籍、そして風呂場には桂浜で月を眺める龍馬像の姿も……。

興味深いのは空間だけではない。オーナーの前田真希さんは、スタンダードからマニアックなものまで高知情報を網羅しており、旅のアドバイスには定評がある。実は、真希さんは10代のころ「はとバス」の添乗員をしつつ、時々バックパッカーとなって海外を約30カ国も旅していた。20代には、地元・高知県のタウン情報誌で副編集長を務め、8年半ほど取材のため高知県全域を駆け巡った。過去の経験を1つにつなげて形にしたいと、2012年（平成24）4月に「かつおゲストハウス」をオープン。宿泊をきっかけに高知が好きになり、今では移住したゲストまでいるという。

2016年7月には、高知県四万十町に姉妹店「かっぱバックパッカーズ」をオープンさせた。これまでの旅人は、高知市内で宿泊後、愛媛県まで高速バスを使って一気に抜けてしまうことが多かった。そこで、通過地点に魅力的な宿を設け、高知県内の滞在時間を増加させようというのだ。「新たな宿をつくったことで、わざわざ予土線に乗って四万十川を見ながら愛媛の宇和島へ行く旅人が多くなり、高知県から愛媛県まで点ではなく線でつなぐことができるようになりました。旅をより楽しんでいただくために、今後はもっと移動のラインを意識的につくっていきたいと思います」と真希さんは話す。

気軽な旅を好むゲストハウスユーザーは、翌日以降はノープランということも多々あり、宿泊先で周囲に相談して旅の予定を立てることも少なくはない。そのため、比較的認知の高い土地に玄関口となるゲストハウスを構えて、通過されがちな土地に姉妹店を設けて利用を促すことは、「通過」を「滞在」へと変える有効手段といえそうだ。

交通インフラが発達した現代だからこそ、簡単に見落としてしまう各地の魅力。龍馬が生きた江戸時代の旅のスタイルを参考に、まだ見ぬ土地と丁寧に出会っていきたい。

4 共有リビングとキッチン。かつおの被り物は手作り。5 風呂場には月の名所「桂浜」に佇む龍馬像。

前田有佳利（まえだゆかり）

国内150軒以上のゲストハウスをめぐるローカル編集者。noiieという商号でフリーランスとして執筆・編集・企画などを担う。ゲストハウス紹介サイトFootPrints編集長。著書に『ゲストハウスガイド100』（ワニブックス）。1986年、和歌山市生まれ。京都・大阪・東京を経て10年越しのUターン。現在は、和歌山の情報発信に励んでいる。
https://www.noiie.jp/

取材協力・写真提供＝かつおゲストハウス